



れんげ畑

鴻巣市立鴻巣中央小学校
令和3年6月号

学校教育目標
キャッチフレーズ
ホームページ

【知】友と学ぶ子 【徳】心の豊かな子 【体】体をきたえる子
「はきはき・にこにこ・きびきび」
<https://kochuo-e-konosu.edumap.jp/>

児童数371人

「褒める」と「叱る」

校長 清水 励

「梅雨入りしたのかな。」と、この時期は雨が降っても晴れていても気にかかります。長雨がしばらく続くことにより「梅雨入り」を遅ればせながら知る、というのが例年のような気がします。

過日、6年生の市内球技大会が行われました。コロナ禍での実施ということで、例年にはない配慮や対応の中、他校の6年生とバスケットボールの試合を行いました。試合結果は「全チーム全勝」という素晴らしいものでした。これは、何よりも6年生の皆さんの「勝ちたい」という強い思いと頑張りがあったからでしょう。そして、その皆さんを信じて指導し、支え続けてくれた担任の岩城先生と静先生、忙しい中時間を割いて練習に参加し声をかけてくれた多くの先生方、また、お家で学校の話聞いてくれたりアドバイスしてくれたたりしたお家の方々、たくさんの支援があつての結果です。6年生の皆さんには、これからも訪れるであろう「この時にかける！」という大切な時に、自分の力を悔いなく発揮するために必要なこと（その時までの時間をいかに過ごすか）を忘れずに、今後に生かしてほしいと思います。

さて、子供たちを育てる上で欠かせない「褒める」と「叱る」について、やや長文になりますが雑感を記したいと思います。「ほとんど叱られたことがない」というお子さん中にもいるかもしれませんが、そう多くはないと思います。この「褒める」と「叱る」という行為を子供の変容に結び付けるには、いくつかの大切にすべき点があると考えています。

一つ目は、「**叱れないなら褒めない**」ということ。「子供は褒めて育てましょう」という言葉はよく聞きます。これは決して間違いだとは思いませんし、無駄に叱ることを勧めているわけでもありません。子供に対して、叱る必要がある時にしっかり叱ることができる信頼関係を築くことができないならば、「褒める」という行為も、あまり善き行為でなく働いてしまうことがあるようです。表面的に「褒める」ことばかりだと、「褒める」ことが子供の心に届かないどころか、無駄な「褒め」によって、子供が、褒められることに満腹になってしまい、「褒められる喜び」を感じなくなってしまうかもしれません。子供のことを思っている「褒める」と「叱る」は、何ら相反するものでなく、「子供のため」という同じ思いに立って行うものです。例えば「あなたは嘘を言っていない？」と、必要な時に子供に言えるかどうか。「子供を信じる」とは、「子供の言うことをすべて鵜呑みに信じる」ということではなく、「子供が正しくありたいという思いをもっていることを信じる」ことであり、「自分の思いをいつか分かってくれると信じる」ことです。大人として、必要な時に必要なことを、子供を信じて言えるかどうか…。

二つ目は、「**褒めるならばその子の頑張り褒める**」ということ。ある研究で、褒める視点の違いによる事後の差を比較したものがあります。A・Bの両グループにあるテスト行い、Aグループには「テストの結果(能力)」という視点で褒め、一方のBグループには「テストの取組方(努力)」という視点で褒めました。その後、両グループの子に、「簡単なテスト」か「難しいテスト」のどちらか選ばせたと、Aグループ(能力を褒められたグループ)の多くは「簡単なテスト」を選び、Bグループ(努力を褒められたグループ)の多くは「難しいテスト」に挑戦することを選んだそうです。子供たちを褒めるべきポイントは、子供たちが「ここは頑張ったよ!」と思っているところであり、その褒め所を見逃さないための子供たちへの理解と共感が欠かせません。難しいこととして、大人から見て子供たちが「一生懸命に頑張っているなあ」と見えても、実は、子供たちは「楽しいから自然に没頭してるだけで、別に努力はしていない」ということがよくあります。そんな姿を褒めることは、善き行動を身に付けさせるためには必要なことかもしれませんが、もっと大切な、本当に子供たちが「頑張ったよ!」というポイントを見逃さずに、心から一緒に喜び合いながら「褒める」ということを忘れず行えるようにしなければなりません。

三つ目は、「**感情だけで叱らない**」ということです。何度も同じことを繰り返して叱ったり、叱られているのに反省の態度が見られなかったりすると、イライラしたりガックリと気持ちを落としたりと、どうしても感情的になりがちです。感情にまかせて叱ることは、子供の人格的な面を非難したり、過去のことまで蒸し返してぶついたり、場合によっては手を出してしまうこと(体罰)もあるかもしれません。そんな時は、「なんでこんなに自分は怒っているのか?」と自分に問う等して、その感情をしっかり自覚、コントロールしながら、「今は、この感情を伝えることも有効な方法かもしれない」と、少し頭を冷ます努力が必要です。「なんで分からないんだ!」と、感情だけで「叱る」ことは、「怒る」にとどまり、そこに子供の姿が無くなってしまい「怒っている自分」が中心となった行為といえます。

長文となりましたが、最後に最も大事にしなければならないこと。それは「**自分が見えていることや知っていることは、子供の一部分のことで、もしかしたら違っているかも知れない**」という謙虚な気持ちを忘れず、大人として先を考えながらも、子供の思いに寄り添おうと努力し続けることだと思います。